

## 海の彼方をみつめて

——デフォーに見る新しいジェントルマンの生き方——

五十嵐理佳

### 1 漱石に好かれなかったデフォー

イギリス留学から帰国した夏目漱石は、1906年9月から1908年3月まで、「十八世紀英国文学」と題して東京帝国大学英文科で講義を行った<sup>1)</sup>。一週3時間ずつ一年半に及ぶ講義を通して漱石が主にとりあげたのは、ジョセフ・アディソン、リチャード・スティール、ジョナサン・スウィフト、アレクサンダー・ポープ、ダニエル・デフォーの5人で、いずれも王政復古（あるいは名誉革命）から18世紀前半までの作家ばかりであった<sup>2)</sup>。つまり漱石は、「十八世紀英国文学」と題しながら、実は新しい時代の始まりと新しい文学の始まりを講じたのである。

漱石はこの時期のイギリス社会の風潮を、デイヴィッド・マッソン（1822-1907）の次の言葉で表現している。

…… from the Restoration of 1660 (perhaps, …… from the Revolution of 1688), British society, and, with it, British intellectual activity, is seen passing into an era of strikingly new conditions. …… Britain then passed into a period in which, to all appearance, *it had 'done with the sublimities.'* …… Is it not one of our commonplaces that 'the Eighteenth Century' …… and 'the Eighteenth Century' must, in this calculation, be reckoned from about the year 1688, the year of our English Revolution, to about 1789, the year of the French Revolution …… was, *both in Britain, and over the rest of the civilized world,* a century bereft of certain high qualities of heroism, poetry, faith, or whatever else we may choose to call it, which we do discern in the mind of previous periods, and distinguished chiefly by a critical and mocking in literature, a superficial and wide-ranging tracks of art and of physical science?<sup>3)</sup>

…… 1660年の王政復古から（おそらくは、1688年の名誉革命からだろうが）、イギリスの社会およびイギリス人の知的活動が、一つの斬新な革新期を迎えたように思われる。イギリス人はこの時期より、崇高なるものをなげうったのだ。 …… 18世紀は、1688年の名誉革命から1798年のフランス革命と考えるべきだろうが、この時代は、イギリスにおいてもまたその他の文明国においても、ヒロイズム、詩、信仰など呼び名はなんであれ、われわれが古い時代の人々の中に見出せるある種の高尚なものがなくなったのだ、文学においては批判的で茶化しの精神、思索においては浅く広くの軽々しさが目立ち、ただ技術と物理科学においてのみある種の発展を遂げた時代だと考えられないだろ

うか。(傍点・斜体、筆者)

そして漱石は、このおよそ崇高なるものの対極に位置するものがデフォーだということである。さらに漱石は「(デフォーの小説は) 気韻小説でもなければ、空想小説でもない、撥情小説でもなければ滑稽小説でもない。ただ労働小説である。どのページを開けても汗の臭いがする。しかも紋切り型に道徳的である」<sup>4)</sup>と批評し、デフォーの文章がこの上なく「無味乾燥」であることを丁寧に論証している。その最大の理由は、デフォーの関心事が「干乾びた事実」であり、たとえ人間を描写する場合でも「人間を時計の機関のごとく心得て、この機関の運転をまったく無神経なる、かつ獸的に無感覚なる筆をもって無遠慮に写してゆく」<sup>5)</sup>からで、しかも自分の周囲の現象については「塵一本でも書き落としてはもったいないという下司張った根性」をもって眺め、「大事な方面はいくらでも目を眠ってつまらぬことを寄せ集める」<sup>6)</sup>ようにして書くからだ、と言うのである。

江戸っ子漱石、ここまで言うかというばかり辛辣な批評ではあるが、確かにデフォーの文章の回りくどさ、事実らしく著わそうとするわざとらしさは否めない。漱石はじめ数多くの批評家が、デフォーの小説について、特に冒頭部分に注目してこのような特徴を考察しているが<sup>7)</sup>、作品のタイトル部分に、すでにそれらは如実に現われている。たとえば『ロビンソン・クルーソー』(1720)の正確なタイトルは“The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner, who lived Eight and Twenty Years, all alone in an uninhabited Island on the Coast of America, near the Mouth of the Great River of Oroonoke, Having been cast on Shore by Shipwreck, wherein all the Men perished but himself, with an Account how he was at last as strangely delivered by Pyrates, written by Himself.”(『他の船員全員が死亡した難破に逢いながら、オルノーコ河口近くのアメリカ大陸沿岸にある無人島でたった一人で二十八年間生き続け、挙げ句の果てに奇しくも海賊に助け出された、ヨーク出身の船乗りロビンソン・クルーソーがみずから物語る、数奇な驚くべき彼の人生と冒険』(傍点、筆者))であり、『ロクサーナ』(1722)は“The fortune Mistress or, a History of the Life and Vast Variety of Fortunes of Mademoiselle de Bealeu, afterwards call'd the Countess de Wintelsheim, in Germany, being the Person known by the Name of the Lady Roxana in the Time of King Charles II.”(『チャールズ二世の時代にロクサーナという名で知られ、後にドイツのヴィンツェルシャイムの伯爵夫人と呼ばれた、ある美しい婦人の莫大な富と運命の人生』(傍点、筆者))である。タイトルを読めば小説の内容が判ってしまう。しかも実際の地名、実在の歴史的人物、具体的な個人名、数的データを取り込み、さらに本文の語りを一人称にすることで、出来事の信憑性を高めようとしているのである。つまりデフォーの小説は、報告書なのである。当時、漱石はすでに『我輩は猫である』に着手しており、この講義を最後に東京帝国大学の教壇を降りて、創作に専念する決意をしていた。漱石は一人の小説家として、デフォーの報告書のような作品を小説などとは断じて認められないと考えたのだ<sup>8)</sup>。

デフォーの作品が事実報告に偏ってしまうのは、彼が元来パンフレッティアーとしてジャー

ナリズムの世界で身を立てていたことが最大の原因であろう。彼の文体が「無味乾燥」になるのは、致し方ないことなのである。ならば、われわれはデフォーの作品に別の面白さを見つければよいのである。その一つの可能性を、漱石の酷評の中にすら探ることができる。漱石はデフォーに対して「あまりに悪口をいった」<sup>9)</sup>と言いながら、『ロビンソン・クルーソー』をめぐって次のような発言をしている。

デフォーは実用の機械なり。…… ロビンソン・クルーソーのごときは山羊を食うことや、椅子を作ることばかり考えている。まったくの実用的機械である。このクルーソーを作ったデフォーもやはり実用的機械である。彼の作物には、どれを見てもクルーソーのような男ばかり出てくる。そうしてこれがイギリス国民一般の性質である。彼らは頑強である。神経遅鈍である。また实际的である。彼らの仕事はみなクルーソー的に成功している。南亜を開拓した手際はまさにクルーソーである。ホンコンをあれだけ蒼くしたのはまさにクルーソーである。彼らはクルーソーをもって生まれ、クルーソーをもって死する国民である<sup>10)</sup>。

冒頭で引用したマッソンの論の中にあるように、崇高なるものをなげうち実用第一を信条に生きようとしたロビンソン・クルーソーは、実はイギリスそのものの姿であった。

王政復古以後、イギリスは確かに以前とは全く異なった視点を持って歩み出そうとしていた。そのようなイギリスの新しい視点を、デフォーは忠実に作品の中で描いているのである。以下、ロビンソン・クルーソーを例にとり、デフォーが生きた時代のイギリスが何を目指そうとしていたのかを考察する。

## 2 クルーソー的なもの

『ロビンソン・クルーソー』もデフォーの小説として例外ではない。この小説も、やはり詳細な主人公の身の上話で始まる。その中でも、かつて貿易で成功したかなり老齢 (very ancient) の父親と、クルーソーの関係紹介は重要である。

かつて貿易で成功し今は平穩に暮らす父と、冒険願望をもつクルーソーは、相反する二つの性質の象徴である。“安定と変動”，“平穩と波乱”，あるいは“着実と冒険”である。父はクルーソーを法律家にしようと教育を受けさせ<sup>11)</sup>、世の中でもっとも安定した「下層社会の上部 (the Upper State of Low Life)」(4) の生活に満足せよと論すが、クルーソーの価値観がこれを受け付けることはない。

ところで、小説中父親の描写について、デフォーは視覚的イメージをほとんど用いていない。このことは、先に言及した、デフォーの文章の報告書的な表現傾向から判断しても注目し得るだろう。デフォーは、意図的に父親のキャラクター性を失わせ、勉めて漠然とした概念に仕立てようとしているのだ。父親はクルーソーの前に、回想の中の「重々しい賢者然とした」

(4) 訓告の声として何度も登場する。船出しようとする度にクルーソーに語りかけ、故郷ヨークに連れ戻そうとするのである。この点からも新たな見方が可能だ。すなわちクルーソーは

より広大な未知なる世界の象徴であり、彼の父は過去の時代の閉じられた空間の象徴と考えられよう。

ところで『ロビンソン・クルーソー』の衰えることのない人気は、28年2ヶ月19日に及ぶ無人島でのサバイバル生活ゆえであろう。平凡な船乗りロビンソン・クルーソーが難破し、無人島に漂着し、そこで徐々に着実に生活を築き上げていく過程が多く読者を引き付けてきた。クルーソーはまず難破した船から銃、弾薬、食料を運び上げ、小屋を建てて山羊を飼い、小船を造り、衣料をくふうし、余ったものは貯蔵して将来にそなえるという堅実なプロセスを踏みながら難局を自力で切り拓いてゆく。自分の周囲に存在するもので、およそ利用できるものはたとえ微々たるものでもその可能性を無駄にせず、有効利用する。これは確かに近代的な経済人と呼ばれるにふさわしい生活様式であり、これまで多数の経済学者が研究対象として注目して来たとしても不思議はない<sup>12)</sup>。

クルーソーが無人島に漂着したのは1659年で、彼が27歳の時であった。しかしこの小説は彼が18歳の時点（つまり1650年）から始まっている。この9年間に起こった出来事は、子供向けの改訂版などではたいてい削除されてしまいあまり注目されることの無い部分であるが、実はこの過程は、クルーソーの精神構造に大きな変化が見られる重要なプロセスなのである。

ではこの間にクルーソーがどのような出来事を体験したのだろうか。それらの概観を、経過順に番号を付して以下に記すことにする。

#### ① 1651年9月1日、

船賃不要という理由で、ハル港からロンドン行き航路に無計画に乗船する。

2週間後、ヤーマス錨地停泊中嵐で難破する。救助される。

#### ② ①の直後

父の戒めを思い出し、陸路で故郷に戻る決意をする。

途中「人々の笑い者になりたくない」、純粹に「命運を向上させたい、このままでは帰れない」（16）という無謀な衝動から、ギニアに航路に乗船する。

現地で仕入れた5ポンド9オンスの砂金がロンドンで300ポンド以上になる。

#### ③ ②のしばらく後

同じギニア航路に金儲け目的で乗船する。

カナリア諸島沖でトルコ海賊船に襲撃され、ムーア人船長の奴隷となる。

#### ④ ③から2年後

チャンスを待って、小船で脱出を計画し成功する。

逃亡の際、小船に数日分の食料、飲料、武器、火薬、ロウなどを搭載する。

ムーア人少年ジューリも連れ出すが、彼は忠実な僕としてクルーソーによく尽くす。

## ⑤ ④の数日後

ブラジルへ航行中のポルトガル船に救助される。

トドス・ロス・サントス港に無事到着し、ムーア人少年ジューリを船長に売り渡す。

現地で農園経営と精糖法を学ぶ。

自ら未開墾地を開拓し、農園経営に成功し4年間を過ごす。

## ⑥ 1659年9月1日

現状に満足できず、黒人奴隷買い付けのためのギニア航路に乗船し、難破する。

④で、小船に可能な限りの必需品を積み込んで将来に備えようとしたり、異教徒の少年ジューリ（もちろん無人島でのフライデイだが）を忠実な僕にしたり、以上にすでに無人島での体験の準備がなされているのであるが、ここでもっと注目しなければならないのは②だろう。なぜならこの航海を境に、クルーソーの内面的な本質に重大な変化が起こっていくからである。

It was my great Misfortune that in all these Adventures I did not ship my self as a Sailor; whereby, tho' I might have workt a little harder than ordinary, ..... for having Money in my pocket, and good Cloths upon my Back, *I would always board in the Habit of a Gentleman*; ..... This was the only Voyage which I may say was successful in all my Adventures, ..... in a word, *this Voyage made me both a Sailor and a Merchant*: for I brought Home *L.5.9 Ounces* of Gold Dust for my Adventure, which yielded me in London at my Return, almost 300 *l.* and this fill'd me with those aspiring Thoughts which have since completed my Ruin. (17)

このような航海で船乗りとして乗り込まなかったことは私にとってまったく大きな損失だった。もしそうしていたら少しは辛い目に逢っていたかもしれないが、それでも、水夫の任務や仕事は覚えたかもしれなかった、…… 懐に金はあるし、身なりだってきちんとしているし、私はいつも船に乗る時には紳士として振る舞っていたのである。…… これは私が試みた全ての冒険の中で唯一成功したものといってよかった。…… 要するに、この航海で私は一人前の船乗りとなり、一人前の貿易商人となったわけだ。一儲けするつもりで5ポンド9オンスの砂金をもって帰ったのだが、それがなんとロンドンで売ると300ポンド近いお金になったのである。これで野心が燃え上がってしまった、それがやがて私の身の破滅をもたらしたのである。（傍点・斜体、筆者）

この航海で、クルーソーは商売の面白さ——少ない資本からでも多額の利潤を造り出す快感——を覚えてしまったのである。ジェントルマン然としたクルーソーは、以後「金もうけをするために」船に乗り込むようになる。Merchant（貿易商人）クルーソーが誕生したのである。

### 3 変容するジェントルマン

英語の Gentleman は「女性」を意味するギリシア語 γυνή を語源とする。元来は、「同じ女性から生じたもの」すなわち「同じ血筋をもつ人間」という意味から、「ある特別な血筋をもつ人間＝特権階級」を意味していた。いわゆる紋章付きの武具を所有する権利を与えられていた貴族で、この意味は、同じ意味のラテン語から英語に入った nobleman と共に 13 世紀にはすでに用いられていた<sup>13)</sup>。

その後、現代まで nobleman の意味は変化していないが、gentleman の方はどんどん変化して来た。14 世紀には「生まれは貴族であっても、行動や行いが騎士道精神に見合っている者」の意味が<sup>14)</sup>、16 世紀には「社会的に高い地位の者、あるいは仕事をせずとも充分生活できる者、金と暇のある者」の意味が加わる。現在では、男性に対する尊称に用いられるまで普遍的になっている。以上のように、イギリスのジェントルマンは<sup>15)</sup>、生まれや王の任命によって生ずるものという本来の意味と同時に、行動や生き方の概念そのものをあらわし、時代の移行と共に後者の傾向が強まってきたといえよう。

では、なぜ理想的なイギリスジェントルマンの生き方とはどのような生き方であるか。その基本的な概念を、われわれは P. J. ケインと A. G. ホブキンズの次の記述に見出すことができる。

完全なジェントルマンは、個人的栄達の前に義務を置くという、名誉の行動規範をもっていた。彼らの行動規範はその根本精神において封建的・キリスト教的なものである。彼の地位は彼をキリスト教軍の前衛に配属する。もちろん歩兵としてではなく騎士や指揮官として。若いジェントルマンは、これらの社会的・宗教的価値観を修得するための長い教育課程を通過しなければならない。そして彼らは、ジェントルマンの技芸といってもよい指導者としての仕事、各種の競争的なスポーツ等のための十分な余暇を保証される社会的地位に就く。……ジェントルマンの基準に支配された序列の中では、物を作るということは低い順位しか与えられない。金のために生産現場で働くということは、そこから離れて金もうけするということと比較して、従属と文化的劣等性を示すものとみなされていた。……現実の世界で生活し同時に卑しい現実を見下すというジェントルマンの奇妙な立場は、巧妙な社会外交によってささえられている。ジェントルマンは所得の必要と仕事への軽蔑とのギャップを、上流社会に認知された職業や活動に参加することで埋めようとする。それらの職業・活動は、世俗の商品生産の世界とははっきりと区別された他人を指揮する天職の世界のものであり、ジェントルマンのライフスタイルに矛盾しないやり方で富を保証しうるものであった<sup>16)</sup>。(傍点、筆者)

市民階級が社会的に力を得ていなかった時代、貴族以外の人間がジェントルマンと呼ばれることは困難だった。彼らの多くは生計を立てるための収入を、肉体労働によって生産現場から得た。十分な余暇時間などあろうはずがない。労働することなしに金と余暇を手に入れる方法は、世襲か窃盗ぐらいだろう。つまり当時はまだ、生まれがよくなければジェントルマンが生まれない時代だったのだ。

しかし17世紀後半ごろから都市部を中心に市民階級が社会的な力を大きくするにつれて、ジェントルマンの概念が大きく変化し始めたのである。市民は、金銭の魅力を知り始めた。お金を貯蓄し、自分の才覚で何倍にもし、物質・精神両面の安定を得る。そしてジェントルマンのような生活を可能にすることを悟ったのである。「ジェントルマンだから金がある」のではなく「金があるからジェントルマンになる」。過去の論理がここで逆転したのだ。

クルーソーの父親は、この論理の正しさを体得した人物である。商売を自力で成功させ、その結果老後の平穩を手に入れた。だがそれ以上の金銭を求めようとはしない。生活はあくまでも「下層階級の上部」で満足する。つまり必要以上に金銭に執着しないのである。なぜなら彼は、ロックが指摘した「商売はジェントルマンの天職とは矛盾する」<sup>17)</sup>ことを心得ていたからである。

ここで彼が「通風を思い寢室に閉じこもったままにいる」(4)ことに注目しなければならない。彼の視野はまだ狭い空間にとどまったままなのである。彼の生年は1600年前後であろう。彼は当時の新興ジェントルマンの代表であり、同時にイギリスの姿でもある。

父の戒めに背いたクルーソーは、航海を通して、父のようなジェントルマンであることよりも、もっと重要な価値観を見出したのである。金銭、道具、原料、土地、自然その他なんでも、自分の才覚を用いて、あらゆるものの可能性を引き出すこと、高めること、そして自分の利益のために最大限に生かすことである。そうすることでクルーソーは苦境を乗り切ることができたのだ。異教徒少年ジューリや、未開人フライデーという人的資源さえも最大限生かすべきものののだ<sup>18)</sup>。これを可能にする人間こそが真のジェントルマンなのである。どんな小さなかけらからも利潤を得ようとする精神。ここにはマッソンが言うように、崇高さはないかもしれない。究極の功利主義なのである。

こうして、自然界に存在するものから最も功利的に最高の利潤を得ること、すなわち加工貿易は、新しいイギリスジェントルマンにとって最も名誉ある生業となる。イギリス本国を活かすため、海外に目をむける必要があったのである。1700年以降、イギリスはクルーソーのように未開の土地、未開の人間を求めて世界に進出し、黒人奴隷売買目的の大西洋三角貿易にも積極的に乗り出した。「未開の人的資質を最大限に生かす」こと、「植民地の生産力を最大限に引き上げること」という大義名分のため、生まれ変わったロビンソン・クルーソーたちが、アフリカ人を大量売買、輸送することに罪悪感など感じようはずもなかった<sup>19)</sup>。そしてクルーソーを創り出したデフォーもまた然りである。

デフォーは晩年、*The English Complete Tradesman* (1725), *A Plan of the English Commerce* (1728), *An Humble Proposal to the People of England for the Increase of their Trade* (1729) の三つの評論を書き、1730年代以降のイギリス経済にとってTrade(商売、貿易)がいかに重要であるかを訴えた。イギリス社会もこれに答えるように、帝国主義への準備を急ぐようになる。パブリック・スクールにおいては、さほど財産を持たない階層の人間が、新しい産業の分野で新しいジェントルマンに成長するよう教育をするようになり、ケンブリッジ・オックスフォードさえもがこれに倣ったのである<sup>20)</sup>。

父親の戒めに背いて、ロビンソン・クルーソーは広い世界を求め、巨万の富を獲得した。同様にイギリスジェントルマンたちも、古の概念を仕立て直し、国外に目を向けて、きたるべき帝国主義時代に備えていったのであった。

注

- 1 夏目漱石『文学評論』春陽堂 明治42年3月、第一編
- 2 それぞれの生年は、Joseph Addison 1672-1719, Sir Richard Steele 1672-1729, Jonathan Swift 1667-1745, Alexander Pope 1688-1744, Daniel Defoe 1661-1731, である。
- 3 David Masson: *British Novelists and Their Styles*, p. 81
- 4 夏目漱石『文学評論』(三) 講談社学術文庫 1952, p. 126
- 5 同書, p. 182
- 6 同書, p. 189
- 7 デフォアの小説は、必ず主人公の生い立ちを詳細に物語ることから始まる。たとえば最近の研究の例として、岩尾龍太郎が『ロビンソンの砦』(青土社: 1994) 第一章において、『ロビンソン・クルーソー』の冒頭部分の非文学性を興味深く論じている。
- 8 『我輩は猫である』の「我輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生まれたか頼と見当がつかぬ。」という書き出しは、主人公の生涯をその始まりから詳細に報告するデフォアの記事のパロディと考えられよう。
- 9 『文学評論』(三) p. 190
- 10 同書, p. 186
- 11 クルーソーの父が息子を慮る姿は、デフォアの父を連想させる。George Chalmersによれば、ロンドンの商家に生まれたデフォアも、熱心な非国教徒の聖職者になるべく、父親にかなり専門的な教育を受けさせてもらったが結局目的を果たせず職を転々としたようである。(George Chalmers, *The Life of De Foe* Oxford; 1841, p. 3.) 彼が通ったのはいわゆる非国教徒のための養成所 (Dissenters' Academy) で、「ここではあらゆる科目が、たとえ哲学、神学であっても英語で行われ」デフォアはそのことに非常に満足しており、そのことで「今も老齢ながら (ancient) 達者でいる父に心から感謝しているが、私自身が阿呆 (blockhead) だったのだ」と後に回想している。(Defoe, *Review*, vol. 2 p. 150) なお父に対する形容詞として、クルーソーの場合と同じ ancient を用いていることは注目に値する。OEDによれば当時 ancient には “Having existed long, and now, in consequence, possessing the attributes of lengthened existence, of old renown” の意味でも用いられていた。
- 12 大塚久雄『経済人ロビンソン・クルーソー』, 小林昇『イギリス重商主義における市場の形成—デフォウ『イギリスの経済事情』について—』, 天川潤次郎『デフォア研究—資本主義経済の源流—』などがある。



- 13 最古の例として gentleman では 1275 年のものが, nobleman では 1290 年のものが OED にある。
- 14 最古の例は 1386 年, チョーサーによるものである。
- 15 Philip Mason, *The English Gentleman: The Rise and Fall of an Ideal*, 1983 によると, フランスのジェントルマン (gentilhomme) は, 生まれや任命のみで決定される。
- 16 P. J. ケイン/A. G. ホプキンス, 竹内幸雄・秋田茂訳『ジェントルマンの資本主義帝国; 創生と膨張 1688-1914』(名古屋大学出版会, 1997) p. 17-18
- 17 Harold Nicolson, *Good Behaviour* (Gloucester, Mass, 1955) p. 194
- 18 ジューリをポルトガル船の船長に 60 スペインドルで売り渡す時, 気が咎める瞬間があるが, ブラジル到着後開墾して人手が欲しくなった時, 彼を手放したことを悔やむ。
- 19 ジャン・メイエール『奴隷と奴隷商人』(創元社, 1992) p. 39
- 20 P. J. ケイン/A. G. ホプキンス, 『ジェントルマンの資本主義帝国』 p. 23